Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-03-14

イタリアから考えるアスベスト被害 : カザーレ・モンフェッラートからの報告(【ワークショップ報告】第32回 : 2019年3月1日（金）)

Prato, Assunta
Pondrano, Nicolino

(Citation)
21世紀倫理創成研究,13:91-93

(Issue Date)
2020-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012044

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012044

【ワークショップ報告 第32回】
2019年3月1日（金）

イタリアから考えるアスベスト被害：カザーレ・モンフェッラートからの報告

Assunta Prato
マンガ *Eternit. Dissolvenza in bianco.* 2012 作者
Nicolino Pondrano
AfeVa アスベスト被害者・家族の会
紹介：加藤　正文
神戸新聞播磨報道センター長兼論説委員

死の棘・アスベスト～酷似するイタリア・カザーレと尼崎の被害

アスベスト（石綿）問題が労災を超えた「公害」であることを明確に示したのは、2005年6月に発覚したいわゆるクボタショックだ。機械メーカー「クボタ」（大阪市）の兵庫県尼崎市の旧神崎工場（1954～97）で、工場の労働者だけでなく、周辺住民にも犠牲者が出ていることを公表した。それから14年。犠牲者（クボタ公表分）は519人に上る。アジア最悪の被害といってよい。

この尼崎と被害の構図が似ているのがイタリア北部のカザーレ・モンフェラートだ。エタニット社の旧工場（1907～86）で内外2千人以上が死亡。世界最悪の被害といえる。世界の石綿被害を見ると、この二つの都市で犠牲者が際立って多い（顕在化している）ことに気づく。

石綿禍は、生産、流通、消費、廃棄という経済活動の全局面で複合的に被害を引き起こす「複合型ストック（蓄積）災害」（宮本憲一・大阪市立大名誉教授）とされる。労災と公害が連続し、産業災害として姿を現す。エタニット社は日本にも進出し、1933年から大宮、高松、鳥栖で石綿製品を生産した。先駆者としてエタニットが日本の石綿産業に与えた影響は大きい。クボタが技術提携していたジョンズ・マンヴィル社とともにさらに調べる必要がある。

①クボタショックの「衝撃」

阪神工業地帯の中心、兵庫県尼崎市。尼崎の公害といえば臨海部の工場が発生源の大気汚染、阪神高速、国道43号の自動車の排ガスである。市中央の住宅密集地に巨大な石綿工場があることを市民のほとんどが知らなかった。クボタ旧神崎工場（尼崎市）で明るみに出た工場内外の被害。1954～97年、石綿パイプ、建材などを製造。毒性の強い青石綿を88,671トン使用。国内最大の量だ。白石綿はさらに多く149,064トン使用。確認された死者は519人のうち周辺住民の死者317人、元従業員の死者202人。元従業員よりも周辺住民の死亡が多い。

②労災から公害へ

充満する粉塵、防御せずに作業。半分が発症、４分の１が死亡という「死の工場」。外への拡散。労災から公害へ。工場から同心円状に広がる被害。問われる因果関係。2,500－4,600万円。因果関係を否定。多額の救済金。「ピークは過ぎた」（クボタ社長）。

③石綿企業・クボタ

神崎、長洲、小田原、滋賀、大浜、鹿島の６事業所で使用。青石綿88,671トン、白石綿1,462,243トンで計1,550,914トン。日本の石綿輸入量9,879,654トンの実に15.6％を占める。６事業所のうち被害は神崎工場が際立っている。水道管で青石綿を使用。ほかは建材中心。

④イタリアの石綿

アスベスト（石綿）の生産を行っていた欧州でも数少ない国の一つ。北西部のピエモンテ州のトリノ近郊には1991年に閉山された欧州最大の採鉱場Amiantifera Balangelo（バランジェロ鉱山）があった。これに加え、同じ州に世界最悪の被害を出しているエタニット社のカザーレ工場（カザーレ・モンフェラート市）もあった。

⑤カザーレ・モンフェラート（Casale Monferrato）

2008年３月に現地調査した。ピエモンテ州の州都トリノの東60キロ。人口36,000人の小さな町だ。その郊外、ポー川流域にエタニット社のカザーレ工場が

あった。敷地面積 96,000 平方メートル。建材、排煙管用パイプ、高圧チューブ管、スレート、石綿セメント製品などを生産していた。使用した石綿の９割がバランジェロ鉱山産出で、残り一割は南アフリカから輸入した青石綿だった。1960 年代のピーク時には 1,700 人が働き、24 時間操業で石綿製品を作り続けた。81 年の石綿総使用量は 15,000 千㌧。青石綿は当時、生産全体の２割を占めていた高圧チューブの製造に用いられていた。粉じんの吸引装置が取り付けられたのは 73 年以降のことだという。「エタニット社の存在は市の経済や財政にとって大切なものだった」。取材に応じたカザーレ・モンフェラート市長マスカリーノは話した。

⑥すさまじい被害

被害者の内訳は、工場関係者の死者＝ 1,394 人、罹患者＝ 416 人、▽一般住民の死者＝ 252 人、罹患者＝２人― となっている。周辺被害は工場から同心円状に広がる。専門家テラッチーニや、ピエモンテ州腫瘍予防センターのＣ・マニャーニらによると、全国平均を基準にした中皮腫発症のリスクは、工場を起点に 2.5 ～ 1.5 キロ＝ 21 倍、▽ 1.5 ～ 0.5 キロ＝ 22 倍、▽ 0.5 キロ未満＝ 27.7 倍。「相当な飛散があったことは間違いない」とテラッチーニは話した。この街では現在も年間 50 人が中皮腫を発症。工場から半径 500 メートル圏内での発症リスクは、イタリア全土平均の 30 倍近くにはねあがる。1960 年代に周辺被害が表面化した際、住民らが「石綿が原因では」と声を上げたが、エタニット社は否定し、被害は拡大した。80 年代に入ってようやく因果関係を認めたものの、被害者から救済を求める声が高まると、87 年に倒産を申請した。

（編集上の理由で「訴訟爆発」に関する最後の項目は記載していませんことをご了解ください。松田毅）

※プラート氏の報告「環境問題と社会問題について若者の意識を高めるためのマンガと新しい方法」は、神戸大学出版会より 2020 年３月末刊行予定の『マンガ／漫画／ MANGA―人文学の視点から』に邦訳が掲載予定です。